

宮沢賢治関連本の紹介 (日蓮・田中智学とエスペラント)

尾形正宏

2008.1.18

はじめに

今月は、「今月の本棚」から宮沢賢治の部分を分離して紹介します。

一昨年来、宮沢賢治が、田中智学の設立した日蓮系の宗教団体・国柱会(これは今でも存在している)に入って活動したのはなぜなのか。田中智学は一般に国粹主義者のようにも言われている。もし、そのまま賢治が生きていたら、賢治も田中智学や石原莞爾と同じように大東亜戦争反対とは言わなかったのだろうか...などというところが気になっていたわけです。もし賢治がそんな思想の持ち主だったら、賢治の作品は、どう読めばいいのだろうか...と。

そんな疑問を解決するべく、いろいろと本を読んだりしてきました。今月は、そんな宮沢賢治関連図書を4冊紹介します。

国柱会・田中智学との関係

龍門寺文蔵著『雨ニモマケズの根本思想 - 宮沢賢治の法華経日蓮主義』(大蔵出版, 1991, 198ペ, 1800円)

そのうちの1冊目。日蓮宗と賢治の関係が知りたくて、それなりのタイトルの本を検索。アマゾンの古本で100円だったので、ダメ元で購入しました(でも送料は340円かかります)。

本書は、宮沢賢治の父政治郎が愛読していた、わが国で最も権威のある宗教新聞『中外日報』に掲載された論稿を主として編集し(はしがき)

たものだそうです。この宗教新聞『中外日報』というものの自体、どんなものなのか知らなかったのでネットで調べてみました。すると、ちゃんと会社のサイトがあり、この新聞については以下のような説明がありました。

明治 30 (1897) 年 10 月 1 日、^{またにるいこつ}真溪渡骨翁によって創刊されて以来、宗教・思想界で唯一の日刊紙として歩みをすすめています。

取材対象は伝統仏教を始め、神社界、新宗教、新々宗教、キリスト教、イスラム教に及びます。それだけではなく、宗教学界や宗門関係学校、宗教関連産業といった各界の情報も幅広く取り入れています。従いまして、紙面内容は内外の宗教界の動向、教学から宗教教育、宗教関連産業、それに出版、芸術、文化、健康、福祉と多

方面にわたっています。(中外日報 <http://www.chugainippoh.co.jp/index.htm>)

25歳だった賢治は、1921(大正10)年、京都にあった『中外日報』の本社を羽織袴姿で訪れています。父政治郎と二人で、それ以来と言うことでもないでしょうが、この新聞紙上には、何度か宮沢賢治特集などが取り上げられているようです。そういった意味でも新聞社とも関係が深そうです。

さて、そんな著者が書いた文章をまとめたのが本書です。

では、賢治と国柱会との関係をまずあげてみます。最近の出来事からいうと、サンケイ新聞社主催によるデパートでの大規模な(田中智学の)展示には、必ず宮沢賢治が登場する。(9ペ)

とあり、あのサンケイは、知名度ある賢治の名前を利用して「国粹主義者・田中智学」の展示に力を与えようとしているように思えます。ともあれ、国柱会・田中智学と賢治とは切っても切れない関係を作っていたようです。

賢治が国柱会の信行部員であり、大曼荼羅を授与され、大正10年に上京して数ヶ月、国柱会で奉仕活動をしていたことは、賢治研究者の等しく認めるところである。(10ペ)

と、国柱会に入会しただけではなく、その信行部員としての活動もしていたようです。しかし、その一方で「賢治研究者の大半が、賢治は国柱会から離れたとみる(同10ペ)」というように、賢治を好きな研究人たちは、どうも賢治がこの田中智学と同じ土俵に在るのがいやなようです。これは、私が感じた違和感と同じなのでしょう。賢治の一時の気の迷いであってほしい...という願い。で、国柱会側は、逆に「賢治は生涯、日蓮主義信仰に生きたとして、大方の賢治研究者の意見に反対している」そうです。まったく、これじゃあ、有名になった賢治の奪い合いですよ。

ただ、学問的には、「そんなのイヤだ!」とは言っていただけません。事実はどうだったのかを調べる必要があるし、それが賢治の作品や生き方にどれくらいの影響があったのかを見る必要があります。

そんなわけで、もう少し読んでいきます。賢治は、大正9年12月2日付けの手紙で保阪嘉内に向けて次のように書いています。

今後私は

国柱会信仰部に入会致しました。即ち私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生のご命令の中に在るのです。謹んで此事を御知らせ致し、恭しくあなたの御帰正を祈り奉ります。(中略)

田中先生に妙法が実にはっきり働いているのを私は感じ私は信じ私は仰ぎ私は嘆じ 今や日蓮聖人に従い奉る様に田中先生に絶対服従致します。御命令さえあれば私はシベリアの凍原にも支那の内地にも参ります。乃至東京で国柱会館の下足番でも致します。そこで一生をも終わります。後略。(一部現代表現にした、42ペ)

賢治は自分の手紙に、これほどはっきりと国柱会・日蓮・田中智学への傾倒を示しているし、そもそも父親とは宗教論を巡って対立までしていたのですから、それは

国柱会への相当の気持ちがあったのでしょう。さらに、この著者はあの『春と修羅』について

端的に言うと、「わたくしといふ現象は、仮定された有機交流電燈の、ひとつの青い照明です…」の難解な詩は、「法華經の法門は電氣的なり」と喝破した田中智学の『妙宗式目講義録』に発想の源を得ており、「講主又曰く、人身の細胞作用もまた電氣的なり」等にヒントを得てつくられているのである。(47 ペ)

と述べ、この「春と修羅」をはじめとして賢治の作品には日蓮や田中智学の影響と思われる表現などが随所に見られると指摘しています。賢治の死後発見された「雨二モマケズ」も、法華經の影響がもろに出ているとも言っています。

日蓮や智学の著作を全く知らない私は、「そういう見方もあるのか」という程度の理解しかできません。ただ、賢治が宗教家(浄土真宗)の家に生まれ、自然との共存などについて深く考えていたところをみると、その作品は宗教的な考え方が影響しているに違いないでしょう。ベジタリアンであり、エスペラント語も学んでいた賢治は、なかなか奥が深いです。

ただ賢治の思想は、本人の思いはどうであれ、時の政府の国家主義の流れと同様に感じられてもいたのも確かなようです。

第二次世界大戦中は、この詩が大政翼賛会の『詩歌翼賛』第二輯に収録され、日本全国へ広まったが、「国民精神総動員」のもと、「滅私奉公」「欲しがりません勝つまでは」のスローガンと結びつけられたのである。(20 ペ)

以上、本書の「第1章『雨二モマケズ』の根本思想」からのみ引用してみた。本書には、このほかに賢治の作品「銀河鉄道の夜」と法華經との関連や、「佐藤惣之助」「高山樗牛」「谷崎潤一郎」と日蓮宗との関連などについての論文がありますが、ここでは深入りしないで、次の本にいきましょう。

松岡幹夫著『日蓮仏教の社会思想的展開 - 近代日本の宗教的イデオロギー』(東京大学出版会, 2005, 347ペ, 6300円)

次に紹介するのが、明治～昭和にかけて日蓮宗を信奉した6名の人物に焦点を当て、彼らの思想が日蓮宗とどういう関係にあったのかを明らかにしようとした論文集です。これまた、すごい本です。何がすごいかといって、まず、自分が興味がないと絶対に読み進められません。それに、この金額。6000円以上もします。「こんな高価な本、研究者しか手に取らないだろう」と思っています。じゃあ、私は研究者か…否、単なる野次馬です。

本書については、一昨年から…ということは宮沢賢治と田中智学と石原完爾との日蓮宗を介した関係が気になってから…題名と値段は知っていました。ただ、あまりにも高価だし、読めないかもしれないと思って手に入れるのを控えていました。



昨年末、アマゾンの古本で3000円で出ていました(全くの新品でした)。しかも正月休みもある。これで一気に読む気になったというわけです。

結論からいうと、半分ほどしか理解できていませんが、とってもおもしろい本でした。第6章の宮沢賢治に行き着くまでにも、それぞれ取り上げられている人物がとっても魅力的なのです。おっと、誰が紹介されているのか書きませんでしたね。

章立てを紹介しましょう。

第1章 田中智学における超国家主義の思想形成史

第2章 北一輝における信仰と社会思想の交渉

第3章 石原完爾の宗教観と世界最戦争論

第4章 妹尾義郎における戦争観の変遷とその思想的背景

第5章 牧口常三郎の社会思想 - 共生社会の理論と信仰

第6章 宮沢賢治の共生倫理観 - 法華経信仰と真宗信仰の相互浸透

終章 近代の日蓮仏教的社会思想はいかなる思想構造を有していたのか

田中智学、北一輝は超国家主義、国体護持などを唱えたいわゆる右翼の親玉のようなものです。石原完爾も国柱会に入って、満州国建設のために邁進し、大東亜戦争を支持してきましたが、戦後には一転平和主義を唱えています。妹尾義郎は、最初は戦争肯定論でしたが、反戦に主張を変えたものの牢獄では転向して娑婆に出て、その後は、戦争協力に突き進んでいます。牧口常三郎は、創価教育学会(創価学会の全身)の創始者です。反戦平和(国家神道にハンタイしただけという意見もある)を訴えて獄中でなくなります。宮沢賢治は、説明するまでもないでしょう。

以上のように「侵略戦争に反対か賛成か」というだけでもさまざまな様相を呈しています。この近世を代表する個性的な6名が、日蓮宗でつながっているとすれば、気にならないはずはありません。「日蓮宗」から学ぶと戦争賛美になるのか平和主義になるのか…。いったい、日蓮の教えとはなんなのか？

結論から言うと、それは一概に言えないようです。

まず、日蓮宗から影響を受けたとはいえ、個人というのは自分が育ってきた環境によって、ほかの要素がたくさん付け加わってきます。

例えば、宮沢賢治の場合は浄土真宗の家に生まれ、父は厳格すぎるほどの真宗門徒でした。田中智学は彼自身の尊王心があったといえます。北一輝は、霊感の強い性格であると自称しており、と同時に明治天皇への崇敬心も厚かったらしいです。

要するに、この6名は、日蓮宗を信奉したということでは共通項はありますが、自分の思想(意識しているかどうかにかかわらず)への生かし方が個々人で違うのは、紛れもない事実なのです。それは、一人一人の、それまでの生活環境や社会的な立場、さらには時代性とも絡んで、特殊な現れ方をしたのだと思います。

ただ、それだけ日蓮宗というのは幅広く受け止められるような教えなのかもしれま

せん。ある時には、国体と同一視され、ある時にはマルクス主義と一致する面もあり、ある時には「世界平和を求めるためにも最後の戦争を」と訴える論理にも変身するようなものなのでしょう。

それでは賢治の部分から少し引用します。幼少期の賢治は、何度も言っているように、

幼少期の賢治の思惟傾向は家庭の真宗信仰に根ざしており、その言動には絶対他力信仰の影響が色濃くにじみ出ている。(272 ペ)

のです。それが、青年期になると少しずつ変わります。

しかしながら他面、青少年期の賢治は、苦界の現実に対してただ仏の絶対慈悲を待ち望む、といった父の現実諦念の態度には強い反発を覚えたようである。(273 ペ)

父の家業の古着と質屋の商売に対して、社会的不平等の立場から、賢治は大変嫌悪感を持っていたといえます。結局、賢治は家業を継ごうとはしませんでした。

大正 3 年、18 歳になった賢治は、島地大等の『漢和対照 妙法蓮華経』と出会い、一読するや大歡喜に身を震わせたという。(中略)

こうした現象即実在論の世界観は、現実悪を嘆きつつも諦観する父の態度に反発していた賢治にとって一大光明だったに違いない。(275 ペ)

と法華経にのめり込んでいきます。

筆者によると、「農民芸術概論綱要」に書かれているあの有名な文章は、智学との関係から見ると次のようなとらえ方となります。

「一切衆生皆成仏道」の願いが込められて『法華経』の流布に生涯を捧げた日蓮は、自己一人の救済に安住することを拒否し、「一切衆生の同一の苦は悉く是日蓮一人の苦と申すべし」(定 1847)と述べて、^{ほうぼう}謗法による全民衆の総罰の苦しみを我が身に引き受けようとした。そして一切衆生に同苦する日蓮の菩薩的精神を、智学は『日蓮聖人之教義』の中で「一切衆生と共に本に帰るにあらざれば、自己の成仏も畢竟は決定しないのである」と表現し、自己が一切衆生と共に成仏しなければ真の成仏ではない、と主張したのである。明らかにこの智学の文言は、「概要」の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉と同質的な主張を有している。賢治は、国柱会の信者として熱心に活動する中で右の智学の文言に接し、それを深く心に刻みつけていたに違いない。すなわち「綱要」における自己即宇宙の共生倫理は、「一切衆生と共に本に帰る」ことが真の成仏であるといった智学の文言を、賢治が共生的幸福論として倫理的に主題化したものだった可能性が高いのである。(288 ペ)

一方、賢治は、最後まで、自分の思想というのを確固として持つことはなかったようです。ずっと迷いながら作品を作り続けていたような気がしてなりません。

宮沢賢治とエスペラント語

佐藤竜一著『世界の作家・宮沢賢治 エスペラントとイーハトーブ』（彩流社，2004，185ペ，1600円）

宮沢賢治が、エスペラント語を使おうとしていたのは知っていました。「イーハトーブ」というのが賢治の故郷・岩手県をエスペラント発音したものではないかと言うことも聞いたことがありました。ただ、なぜ賢治がエスペラント語に興味を持ち、自分の童話の世界にまで取り入れようとしたのか、そのあたりを知りたくて本書を購入しました。ただ、これは、アンテナを張ってあっただけで、積極的に求めた本ではありません。金沢で一番おつきい本屋さんへいった時に、タイトルを見て原価で購入しました。



1926（昭和元）年11月、旧交を温めようと盛岡中学校時代の友人・小菅健吉が訪ねてきます。賢治はそのとき小菅に対し、『世界の人に解ってもらおうようエスペラントで発表するため、その勉強をしている』と語ったとされています。（10ペ）

とあるように、賢治は、自分の書いた童話や詩を世界に発信するためにはエスペラント語の勉強が不可欠だと考えていたようです。

それでは賢治はいつ頃からエスペラントに関心を寄せたのでしょうか？ 岩手県出身の著者は、「岩手県がエスペラントときわめて深い土壌にあると気づきました」と述べています。日本語速記術の創始者・田鎖綱紀（1854-1938）は早い時期にエスペラントに関心を寄せていたそうですが、彼は盛岡市出身でした。その綱紀が、1916（大正5）年、『岩手日報』に6回シリーズでエスペラントの特集記事を書いています。この頃賢治は盛岡高等農林学校の生徒です。好奇心旺盛な賢治が、地元の新聞を読んでいた可能性は大いにあります。

当時、二葉亭四迷（1864-1909）や新渡戸稲造（1862-1933，岩手県盛岡市出身）、あるいは、ロシアの文豪トルストイなども積極的にエスペラントを勧めており、さらには民俗学者の柳田国男（1875-1962）やその著書『遠野物語』の語り部であった佐々木喜善（1886-1933，岩手県遠野市出身）なども、エスペラント語と深い関わりがあったようです。喜善とは、晩年、賢治とも直接のつきあいがあったと「ウィキペディア」には書いてありました。

世界に目を向けている文学者がエスペラント語を広めようとしていた時代。「地域の文化や伝統、方言を大切にすることとエスペラント語は両立できる」と感じた柳田国男や宮沢賢治がいたのです。

1926年、賢治、7度目の上京の間、父政治郎に宛てた手紙には以下のようなものがあります。

今日は午後からタイピストで学校で友達になったシーナといふ印度人の紹介で東京国際倶楽部の集会に出て見ました。(中略)

そのうちフヰンランド公使が日本語で講演しました。それが尽く物質文明を拝して新しい農民の文化を建てるといふ風の話で耳の痛くないのは私一人、講演が済んでしまふと公使はひとりあきらめたやうに椅子に掛けてしまひみんなはしばらく水をさされたといふ風でしたが、この人は名高い博現博士で十箇国の言語を自由に話す人なので私は実に天の助けを得たつもり、早速出掛けて行って農村の問題等にも方言を如何にするのかの問題など尋ねましたら、向ふも椅子から立っている話して呉れました。やっぱり著述はエスペラントによるのが一番だとも云ひました。

この賢治の手紙について、佐藤氏は次のような解説を載せています。

冒頭に出てくる「タイピスト学校」とは東京 YMCA タイピスト学校で、賢治はタイプライターを熱心に学んでいたのです。

「フヰンランド公使」とは、言語学者としてのラムステッドのこと。1920年に来日し、10年ほど日本で過ごしました。賢治は『改造』1922年8月号を読んでいますから、当然すでにラムステッドのことは承知していました。エスペランチストとして活躍した人です。

すでに、羅須地人協会を設立し実践していた賢治は、「耳の痛くないのは私一人」と書いています。(115 ペ)

方言の問題とエスペラントの学習が密接に結び付いているのがわかります。賢治は自身の体験から、方言を越える必要性を痛感していました。その手段としてエスペラントを習い、農村にも普及しようとしたのだと思います。(116 ペ)

賢治は、晩年、農民の中に入って、農民のなかから芸術を創造し活力を作り出そうとしました。それが「農民芸術概論綱要」や羅須地人協会としての活動となったのでしょう。そのときに、方言という大きな壁にぶつかります。地域から発信するためには、方言が変わるもの、方言を大切に守りながらも、地域から発信するための方法。それが賢治にとって、エスペラント語だったのかもしれない。

エスペラント語って、どんな言葉なのか、まだよく知りませんが、ネットを見てみると「エスペラント語のウィキペディア」があるを見つけました。今でも相当のエスペランチストがいると云うことですね。

宮澤静六著『兄のトランク』(筑摩書房, 1987, 240ペ, 1700円)

賢治に関する本を読んでいる時に、弟静六から聞いた話とする引用もよくあります。それでその弟静六がまとめた本『兄のトランク』を読んでみました。これまた古本で30円でした。送料はかかるけど、やすい!

賢治が自分で残した作品や手帳のメモ、家族や知人宛の手紙を収集すれば、たいていのことは分かるのかもしれない。しかし、もしそこに書かれていないことであった場合、こういう身内から見た賢治の姿というの、賢治を多方面からとらえる時に

はとても大切になるんだろうなと思います。

たとえば、映画に関しては

子供のころから今まで、映画で私と兄とに一番強く有難い影響をあたえてくれた人はチャールズ・チャップリンでしょう。 (「映画についての断章」 24 ペ)

ともかく、ほんとうの意味で、いい映画は心象スケッチ的だと思われまじし、じつは賢治も映画は好きで名作といわれるものはこっそり見ていて、いつかは自分の会心の作を、例えば「銀河鉄道の夜」や「ポラーノの広場」や「グスコブドリの伝記」などを、自分で監督して映画化したいものだと思ったかもしれません。(同上、31 ペ) などと当時を回想し、賢治がとても映画好きだったことがうかがえます。また、音楽についても「兄とレコード」という章で、

やがてしっかりした解説書といっしょに英国版の「月光」や「運命」の組物が入って来たときの兄の喜びは大したもの、「この大空からいちめに降りそそぐ億千の光の征矢はどうだ。」「繰り返し繰り返し我らを訪れる運命の表現の素晴らしさ。おれも是非共こういものを書かねばならない。」と言いながら書き出したのが『春と修羅』である。つまり此のころ兄の書いた長い詩などは、作曲家が音譜でやるように言葉によってそれをやり、奥にひそむものを交響曲的に表したいと思ったのであろう。そのためにもいつも兄は手帳を持っていて、野山でも汽車の中でも暗がりでも病床でも、死ぬまで自分の考えを忘れないうちにスケッチした。 (34 ペ)

と述べています。あの難解な『春と修羅』を味わう時には、交響曲を聴いているつもりで味わえばいいのかもしれませんが。なるほど、そう考えると、ゆったりとあの「詩」と向かい合えそうな気がします。

本書は、静六氏がいろんな書物に書いたものを集めたものです。表現を読んでいると、ところどころに賢治のような表現があります。まさに心象スケッチです。

本書は現在『ちくま文庫』からも出ています。